

ものづくり産業を支える仲間たち②9

基幹労連－川崎重工 車両カンパニー兵庫工場



川崎重工車両カンパニー兵庫工場の構内

JR 兵庫駅から車で5分程度、今回訪問した川崎重工 車両カンパニーのメイン工場「兵庫工場」にある12階建の車両本館ビルの玄関脇には、同社で製造した特急「こだま」の車両と0系新幹線が展示されていた。特急「こだま」は1958年11月に走りはじめ、東京－大阪間を6時間50分で結びビジネス特急と呼ばれ、日本の高度成長期を支えた。また、0系新幹線は1964年の東海道新幹線開業時に開発された初代の新幹線車両であり、展示されているのは2008年12月に山陽新幹線でラストランを走った車両である。

川崎重工が鉄道車両製造に着手したのは鉄道国有法が公布された1907年のこと。以来、国産化第1号蒸気機関車や日本初のアルミ車両をはじめ、鉄道の歴史に残る数々の名車両を製造してきた。1907年の鉄道車両製造に着手以来、現在までに約9万両の鉄道車両を製造している。新幹線に代表される高速車両では、同社の航空宇宙部門がもつ流体力学の技術を活かして、その開発・設計に参画してきた。さらに、特急電車、通勤電車、地下鉄電車、貨車、機関車、モノレール、新交通システムに至るまで、川崎重工の車両製造の歴史は、鉄道輸送発展の歴史そのものと言える。その取り組みは、単に車両だけにとどまらず、鉄道交通システム全体の発展を支えてきた。

現在、ニューヨーク州ヨンカースにある米国現地法人 Kawasaki Rail Car, Inc.(KRC)

に加え、2002年には、ネブラスカ州リンカーンにある Kawasaki Motors Manufacturing Corp., U.S.A. (KMM) 内にアメリカ唯一の鉄道車両一貫製造工場を新設。兵庫工場をマザーファクトリーとして、日米3つの生産拠点で世界の車両需要に応えている。兵庫工場内では、日本ではお目にかかれないカラフルな真っ赤な車両が製造されていた。アメリカのニューヨークと郊外を結ぶ路線の新しい車両を製造しているとのこと。量産が進むまでの一部を兵庫工場で製造し、残りはKMMにて製造される。現在、KMMから5名の現地労働者が来日、同工場で研修を受けていた。日本人のベテラン作業者が現地研修生に技術指導しているが、ボディランゲージを駆使して教育しているとのこと。

兵庫工場の生産能力(月間)は、客電車を80両、機関車を8両製造する能力を持っている。各種の機能を計測する機器や環境試験装置が装備されており、最高速度時速420kmまで計れる台車走行試験装置も備えてある。車両の素材は主にステンレスや鋼、アルミニウムを使って作られている。工場内には、車体反転装置も設置しており、天井裏の配線や器具据え付けも無理な姿勢をとらずにスムーズにできるように工夫している。

兵庫工場内では、新型の新幹線をはじめとして様々な種類の鉄道車両が製造されている。号車の表紙のイラストは、新型新幹線の先端の組立部分の作業工程を描いている。先端の流線型部分は、アルミパネルを貼り合わせてつくっていく。曲面の構体に1メートル四方のアルミのパネルを貼り合わせていく作業は簡単ではない。継ぎ目と継ぎ目の間の



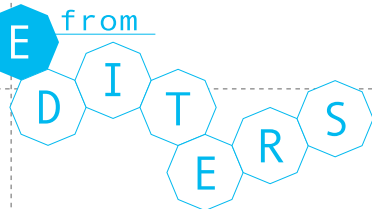
兵庫工場の中、製造中の車両が林立

溶接工程は、高度な溶接技術が求められる。5年から10年のベテラン溶接工が作業に当たっている。帰りに、神戸ポートタワーの近くで、神戸海洋博物館の中カワサキワールドを見学。ここでは川崎重工の歴史や社会の発展に貢献してきた陸・海・空にわたる代表的な製品が展示しており、見て、触れて体感することが出来た。また、神戸ハーバーランドの一角には、日本で最初に「8時間労働制」を導入した川崎重工の「8時間労働発祥 記念モニュメント」があるとのこと。

人の暮らしの快適さを実現する職場は、人の働き方の快適さも追究していることを実感しつつカワサキワールドを後にした。(美)



新幹線先端部分の製造



◆今号では、「航空宇宙産業と日本のものづくり技術」と題して特集を組んだ。7年間の宇宙の旅路を終え無事帰還した「はやぶさ」、宇宙ステーション「きぼう」での山崎直子宇宙飛行士の活

躍等、今、航空宇宙産業は注目されている。毛利衛氏の特別対談は21世紀に地球と人類を守る「ものづくり」への発想の転換を迫る。また、航空宇宙産業を支えるものづくり企業では、特筆すべき大手、中小の企業を訪問、ものづくりの執念と夢を取材。取材にご協力いただいた団体、企業の関係者の方々、そして基幹労連の濱洲事務局長、弥久末中執に心から感謝。

◆第41回労働リーダーシップコース報告と合

わせて世界で一番大切にしたい会社を選ばれた中村ブレイス社長の特別講演を掲載。石見銀山からのメッセージをかみしめたい。

◆今、超高齢社会日本で100歳以上の高齢者の行方不明が増えている。家族、友人、地域のつながりは、自分らしい「思いやり」と「感謝」の小さな振る舞いの継続から。(美)

Summer
issue
[夏号]